

渋沢栄一ツアー ・ 4

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

東京商工会議所江東支部では、渋沢栄一の五代目子孫にあたる渋沢健氏（銀行勤めから外資のGPモルガン東京などを歴任し、2001年シブサワ・アンド・カンパニーを創業、2007年コモンズ投信株式会社を創業し代表取締役役に就任した渋沢健氏）の講演会があり、渋沢栄一シリーズ4として講演の要旨をもとにレポートします。

◇日本・世界経済の展望とこれからの資本主義の行方

◇見えない未来を創り出す

米大リーグエンジェルスの大谷翔平は、高1の時に野球人生に対する目標を作った。投手としての生命線である球速160キロ、バッターとしても、ホームランの数、打率、打点数、出塁率、盗塁数、高卒後大リーグ一流チームへの入団、投打の二刀流を目標としてきた。

現在の自分を目標と比較してみるとケガを除けば、ほぼ目標に向かって進んでいると言える。これが大事だ。「人間何をするにも何か目標が無ければならない」。

◇豪農の生まれ

栄一の生家は農業、養蚕、藍玉の製造そして販売まで手掛ける豪農であった。生家の仕事を手伝いながら「見えない未来を見よう」と模索し、幼少のころから読書に励み、7歳の時10歳年上の従兄尾高惇忠に師事、「四書五経』『史記』『春秋左氏伝』『日本外史』『日本政記』等などの本格的な古典からの教えを受けていた。

◇歩きながらの読書

どのくらい読書にのめり込んでいたのか。正月に晴れ着姿で年始回りに行く途中も読書しながら歩いていたが、夢中になり「どぶ」に落ちてしまいお正月の晴れ着を汚してしまい、母親に叱られたという逸話があるほど熱心に読書した。この頃の勉強が後の資本主義の父と言われ、人として大成した基本となったのではないかと推測する。

◇ここでの教訓

栄一の未来への目標はどこにあったか定かではない。「資本主義の父」と言われるほどの大人物を目指していたのか？1万円札の表紙になることまでは考えていなかったと思うが、とにかく二宮金次郎の如く、歩く間も惜しんで読書し「万卷を極めるぞ」の覚悟と目標を持っていたのではないかと推測する。

◇ここでの教訓

人間30歳までは蓄電の時期、30歳過ぎてからの30年間60歳まで、体力もあり寝ずに働いても頑張りも利き、本当の仕事ができる年齢だ。企業も同じで、会社の一業種の寿命も30年説もあるほどだ。30年とは、あらゆる意味で人生のそして企業の一区切りではないか。30歳を中心に前後2～3年からは勝負どころではないか。兎に角若い時は、力を出し惜しみせず、出し切れれば次へ進めることではないか？

◇見聞を広める

幕末に一時は尾高惇忠らと共に倒幕を試みるほど血気にはやっていたが、情報収集能力にたけていた栄一はいち早く体制を見極め、幕府に奉職する。徳川最後の15代将軍徳川慶喜の命を受けヨーロッパ諸国を巡り見聞を広め帰国後、幕府を退き下野した。ここからが栄一の本領発揮が始まる。

◇集まろう

維新後、欧米の列強に対抗するにも、「士農工商」最後部に位置する商人達には世論として纏まった意見がなく、この点を「日本の実業界に関税問題などでは、単なる反対意見のみで、日本には纏まった世論がないのか」と列強からこの点を突かれていた。そこで栄一は商工業者が集まって団体を作り、意見を一つにまとめ所謂世論として欧米に、「物申せば」、列強も日本の総意即ち世論として受け止め、交渉ごとのきっかけとして商談などへの第一歩となる事ができる、として商人たちに団結を呼びかけた。

◇論語と算盤

論語で道徳を重んじつつ算盤で経済を強くする。道徳を学び商売を学ぶ。人間は誰でも力は持っている。しかし個人の力は知っている。集まらなければ大きなことはできない。国を動かし欧米列強に追いつき追い越すには、まとまらなければならない。この力を集めて同じ方向にもっていけば大きな力になる。

◇「蟻も集まれば巨象も倒す」

真面目に真摯に、正直が基本だが、「論語だけでは飯が食えない」、算盤が無ければならない。事業として成り立たねばならない。まさにこれが、「論語と算盤」だ。論語そのものについては機会を見つけてレポートします。

1873年(明治6年)栄一は大蔵省を辞めて野に下り、75年(明治8年)に第一国立銀行の頭取になる。

◇第一銀行設立の理念

銀行は大きな川のようなもの、まだ銀行に集まってこない金は、溝にたまっている水や、ボタボタ垂れているシズクと変わらない。時には豪商、豪農の蔵に隠れていたり、一般庶民の懐に潜んでいたりする。それでは人の役に立ち、国を富ませる働きは現さない。水には流れる力はあっても、土手や丘に妨げられては、少しも役に立つことができない。ところが銀行を建てて上手にその流れ道を開くと蔵や懐にあった金が寄り集まり、大変多額な資金となる。そのおかげで貿易が繁盛し、産物も増えるし、工業も発達するし、学問も進歩するし、道路改良されるし、全ての国の状態が生まれ変わったようになる。

◇東京商法会議所(現日本商工会議所)や、東京株式取引所(現東京証券取引所)設立に中心的役割を果たし、「日本資本主義の父」と言われた。このほかにも栄一が関わった会社は、沙紙会社(王子製紙)、東京海上保険会社(東京海上火災)、日本郵船、東京電灯会社(東京電力)、日本瓦斯会社(東京ガ



日本商工会議所・東京商工会議所新築ビル竣工記念時渋沢栄一銅像前見学者と共に

ス)、帝国ホテル、札幌麦酒(サッポロビール)、日本鉄道(JR)などで総計500社を数えた。信じられないことだ。

◇関わった会社は500社

1年365日を無休で働いたとして1日1社で約1年半かかる。10社で50日どんな経営をしていたのか？我々のような中小零細企業経営の凡人には、計り知れない。幼少の頃、「歩きながらの読書に夢中になりドブに落ちた」の逸話の通り勉強した蓄積がものを言ったのであろう。

◇渋沢栄一と岩崎弥太郎

ある時、三菱の創始者岩崎弥太郎の呼びかけで、2人は向島の料亭で会談した。当時はこの若造2人の存在感は大きかった。岩崎弥太郎43歳、渋沢栄一38歳の時だ。

弥太郎は日本の富を独占しよう。栄一は、富を独占する考えはなく、日本国全体に様々な事業を起こし、日本国をそして日本国民を豊かにし、欧米に負けない国を創ることが理念だ。栄一の合本法(株式組織)を、「論語と算盤」の道義的運営により富は国民が豊かになるよう分散すべきとして、議論は真っ向から対立した。弥太郎の主張は「合本法は船頭多くして船山に登る」、栄一は「独占事業は欲に目がくらんだ利己主義だ」と真っ向から対立、栄一はなじみの芸者を引き連れて席を立ち、喧嘩別れしたが、東京海上火災を起こした時、両者は出資し仲直りしたが、日本郵政の件でも考えが違っていた。

もし栄一が弥太郎に同意していたとしたら、今の日本は違うものになっていた可能性が高い。

◇世界第3位の経済規模

現在の日本は栄一の揺るぎなき精神のもとに、1968年以来2010年(平成22年)までの45年間にわたる名目GDPでは、アメリカに次ぐ世界第2位の規模を保持していた。現在は中国の急激な成長により順位を譲ったが、それでも、世界第3位の経済大国として経済規模を保持している。

もし、弥太郎の言うとおりにしたら、日本の中小企業は今日の地位を築き維持していったかどうか。正に渋沢栄一には「日本資本主義の父」として改めて絶大なる感謝の意を贈りたい。1万円札の表紙になるぐらいは当たり前のこと。時期としてはむしろ遅すぎたくらいだ。

続く